ぷれっそ 49 号　福々刻々

新型コロナウイルス感染症

政府の要請で、チャーター便が武漢を発ったのは 1 月 29 日早朝のことでした。この時点で多くの人は新しい感染症に関心をもったわけですが、自分たちの生活がこんなに変化するとは思わなかったのではないでしょうか。その後感染拡大を阻止あるいは遅らせようとする対策を国や都が講じ、厳しい生活の制限が生まれました。世界各国の感染対策も同様でした。ヒト・モノ・カネの流れを加速させてきたグローバリゼーションが機能不全となり、経済を今後どう維持・発展させるのかという問題が新たに浮上しました。これまで経験したことのない状況が生まれ、まだ解決の道半ばです。

この間、福祉施設や病院での集団感染の拡大が報道され、ひとたび感染が起これば想像を超えるリスクを抱えねばならないということを突き付けられました。感染がいつ起きるかわからない中で、私どもの現場も強い緊張を持続させる日々が続きました。特に特別養護老人ホーム・障害者支援施設（入所）・グループホームといった 24 時間ケアが求められる事業所では、「密」を避けることができない状況下でのサービス提供となりました。ローテーション勤務の一人ひとりが個人のレベルでも高い倫理性を求められました。日勤帯の職場も同様で、ウイルス（SARS-COV-2）の増殖を防ぐ根本的な方策が示されない中で、職員は役割を果たすべく最善の努力をしたと思います。そしてご利用者・ご家族には多大なご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

さて、急変する大きな変化にどう対応するのか。これは誰もが頭をよぎることです。東日本大震災以降、想定外のトラブルが起きた時に、回復のために迅速に行動できる、機動性のある社会をどう作るのか、これは共通のテーマになったと思います。熊谷晋一郎氏（車いすの医師、東大准教授）は「コロナ禍」と言われるこの状況は連帯に向かう良い機会になり得ると言います（NHK ハートネット TV）。私はその言葉から 3 年前の「『地域共生社会』の実現に向けて」を思い起こしました。「分野の枠を超えて連帯し（中略）豊かさを生み出す」ことが必要だと国はその中で強調してきました。

この「連帯」はゆるやかな社会的紐帯と理解できます。変化に対応できる社会のキーワードの一つがこの言葉だと思います。人と人の好ましいつながりは活力を生み出すことができるからです。私ども社会福祉法人はこうした取り組みの一翼を担っていると改めて思いました。

令和２年８月　安藤　真洋